國學院大學学術情報リポジトリ

「飛鳥 明日香」：異文化をどう和化したか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, さやか, Inoue, Sayaka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000043

「飛鳥　明日香」
—異文化をどう和化したか—

井上さやか

一、はじめに

「とぶとりのあすか」という表現は『万葉集』中に四例あり、「とぶとりの」は地名である「あすか」を修飾する枕詞とされている。

本居宣長は『古事記伝』において、「元を改めて朱鳥元年と曰ふ。仍りて宮を名けて飛鳥浄御原宮と曰ふ」という『日本書紀』朱鳥元年（六八六）七月二十日条の浄御原宮命名記事に基づき、「飛鳥」は「とぶとりの」と訓読すべきことを唱え、「大宮の号を、飛鳥云々と云から、其地名にも冠られて、飛鳥の明日香」というようになったと説いた。

宣長説に対して展開されてきた賛否両論については、菊地義裕氏の「枕詞『飛ぶ鳥の』の成立」に詳しい。[1] 早くに伴信友による金石文などの資料に基づく反論がなされ、「飛鳥」の表記例が朱鳥元年以前に遡るとされた一方で、銘文の解釈によってはいずれも朱鳥元年以降の例でしかないことも指摘されてきた。

ただ、後述するように、二〇〇一年に国史跡に指定された飛鳥池工房遺跡から天武朝の物とみられる「飛鳥寺」や「飛鳥」

という人名が書かれた木簡が出土していることから、従来考えられてきたよりも古い年代から「飛鳥」という文字列がアスカと訓まれ書かれていたことは、もはや疑いようがないと考える。

他方で、万葉歌では地名のアスカを「明日香」と表記する例が多い中、四例の枕詞はいずれも「飛鳥」で統一されていることから、枕詞としての「とぶとりの」は、当初から「飛鳥」という文字列と密接な関わりを持って誕生した可能性が考えられる。そこには、「土地ぼめ」の詞章に源泉を求め得るような、いわゆる古層の枕詞の成立とは異なる現象が垣間見えるようにも思われる。

そこで本稿では、「飛鳥」という統一表記に着目しつつ、「とぶとりのあすか」という古代和歌に特徴的な表現について、中国文学の影響という観点を交えて考えてみたい。

二、「飛鳥」という表記

「とぶとりのあすか」という表現は、『古事記』や『日本書紀』、金石文や木簡資料などにはみられず、『万葉集』にのみ四例が見出せる。次にその書き下し文と当該箇所の原文（【　】内）とをあげる。(2)

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて迥かに古郷を望みて作れる歌〔一書に云はく、太上天皇の御製といへり〕

飛鳥の明日香の里を【飛鳥　明日香能里乎】置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ〔一は云はく、君があたりを見ずてかもあらむ〕　（1七八）

柿本朝臣人麻呂の泊瀬部皇女・忍坂部皇子に献れる歌一首　并せて短歌

飛鳥の　明日香の河の【飛鳥　明日香乃河之】上つ瀬に生ふる玉藻は　下つ瀬に　流れ触らばふ　玉藻なす　か寄りかく寄り　靡かひし　嬬の命の　たたなづく　柔膚すらを　剣刀　身に副へ寐ねば　ぬばたまの　夜床も荒るらむ〔一は云はく、あれなむ〕そこ故に　慰めかねて　けだしくも　逢ふやと思ひて〔一は云はく、君もあふやと〕玉垂の　越智の大野の　朝露に　玉藻はひづち　夕霧に　衣は沾れて　草枕　旅宿かもする　逢はぬ君ゆゑ（2一九四）

右は或る本に曰はく、「河島皇子を越智野に葬りし

時に、泊瀬部皇女に献れる歌なり」といへり。日本紀に云はく、「朱鳥五年辛卯の秋九月己巳の朔の丁丑、浄大参皇子川島薨りましぬ」といへり。（2一九五左注）

明日香皇女の木瓱の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首　并せて短歌

飛鳥の　明日香の河の【飛鳥　明日香乃河之】　上つ瀬に　石橋渡し〔一は云はく、石並み〕　下つ瀬に　打橋渡す　石橋に〔一は云はく、石並みに〕　生ひ靡ける　玉藻もぞ　絶ゆれば生ふる　打橋に　生ひをれる　川藻もぞ　枯るればはゆる　何しかも　わご大君の　立たせば　玉藻のもころ　臥せば　川藻のごとく　靡かひし　宜しき君が　朝宮を　忘れ給ふや　夕宮を　背き給ふや　うつそみと　思ひし時　春べは　花折りかざし　秋立てば　黄葉かざし　敷栲の　袖たづさはり　鏡なす　見れども飽かず　望月の　いや愛づらしみ　思ほしし　君と時々　幸して　遊び給ひし　御食向ふ　城上の宮を　常宮と　定め給ひて　あぢさはふ　目言も絶えぬ　然れかも〔一は云はく、そこをしも〕　あやに悲しみ　ぬえ鳥の　片恋嬬〔一は云はく、しつつ〕　朝鳥の〔一は云はく、朝霧の〕　通はす君が　夏草の　思ひ萎えて　夕星の　か行きかく行き　大船の　たゆたふ見れば　慰もる　情もあらず　そこ故に　せむすべ　知れや　音のみも　名のみも絶えず　天地の　いや遠長く　思ひ行かむ　み名に懸かせる　明日香河　万代までに　愛しきやし　わご大君の　形見かここを　（2一九六）

昔老翁ありき。号を竹取の翁と曰ふ。この翁、季春の月に丘に登り遠く望むに、忽ちに羹を煮る九箇の女子に値ひき。（中略）すなはち作れる歌一首　并せて短歌

緑子の　若子が身には　たらちし　母に懐かえ　襁褓の　平生が身には　木綿肩衣　純裏に縫ひ着　頸着の　童児が　身には　夾纈の　袖着衣　着しわれを　にほひ寄る　子らが同年配には　蜷の腸　か黒し髪を　ま櫛もち　ここにかき垂れ　取り束ね　揚げても纏きみ　解き乱り　童児に成しみ　さ丹つかふ　色懐しき　紫の　大綾の衣　住吉の遠里小野の　ま榛もち　にほしし衣に　高麗錦　紐に縫ひ着け　指さふ重なふ　並み重ね着　打麻やし　麻績の児らあり衣の　宝の子らが　打栲は　経て織る布　日曝の

麻紵を　信巾裳なす　脛裳に取らし　支屋に経る　稲置丁女が　妻問ふと　われに遣せし　彼方の　二綾下沓　飛ぶ鳥の　飛鳥壮士が【飛鳥　飛鳥壮蚊】　長雨禁み　縫ひし黒沓　さし穿きて　庭に彷徨み　（中略）　かくの如　為らえし故し　古の　賢しき人も　後の世の　鑑にせむと　老人を　送りし車　持ち還り来し　持ち還り来し

（16三七九一）

これらを一見してわかるのは、枕詞に該当する部分は四例とも「飛鳥」と表記されていること、続く地名は「明日香」（三例）または「飛鳥」（一例）と表記されていること、である。地名の「飛鳥」をアスカと訓むのは慣用的用法であるが、これら四例では地名の「明日香（飛鳥）」に連なる言葉を書き表すために用いられていることが明らかである。

この枕詞としての「飛鳥」については、トブトリノと訓読するのが一般的であるが、金井精一氏は、万葉集中の枕詞の表記方法を検討した上で、柿本人麻呂の独創とみる一六七番歌の「飛鳥之　浄之宮」の例を除いて、トブトリと四音で訓むべきであると結論している。[3] その際、当該枕詞の発生由来は不明としつつも、「つぎねふ山代」「うまさけ三輪」「おしてる難波」「そらみつ大和」「さねさし相武」などの用例をあげて、地名には古くは四音の枕詞がかかる場合が多いとしている。枕詞の背景に、古い土地ぼめの伝統的な詞章を想定しての言及であるとみられる。

そうした伝統的な詞章の存在を否定はしないが、当該例の場合にもそれが当てはまるかどうかは、自明のこととはいえないのではないだろうか。「とぶとり（の）」という和歌表現から「飛鳥」という表記が生じて定着した、「飛鳥」より「明日香」の表記の方が古い、といった過程を無条件に想定することにはやや疑問もある。

「飛鳥」をアスカと訓んでいる例は、『古事記』や『日本書紀』においてもみられる（垂仁記「飛鳥君」、仁徳紀「飛鳥山」「飛鳥戸郡」など）。それらの記述を実年代とみなすことはできないが、八世紀の表記意識と理解することは可能であると思われる。

あわせて、これまで議論されてきた金石文の例を掲出すると、次の通りである。

イ　飛鳥浄原大朝廷

（采女氏塋域碑、持統三年〈六八九〉）

ロ　飛鳥浄御原宮治天下天皇
（小野朝臣毛人墓誌、持統朝以降か）
ハ　飛鳥清御原大宮治天下天皇
（法華説相図銘、文武二年〈六九八〉以降か）
ニ　飛鳥浄御原大宮
（那須直韋提碑、文武四年〈七〇〇〉）
ホ　飛鳥浄御原天皇
（美務岡万墓誌、天平二年〈七三〇〉）

ロやハについては年代の解釈に諸説あるが、菊地氏は、先行研究を検証した上で、これらの例はいずれも朱鳥元年以後のものとみて、冒頭にあげた宣長説を否定している。本稿でもそれに従いたい。

ただし、菊地論文ではその後、金石文において最古の例とみる持統三年にはアスカを「飛鳥」と表記することを踏まえて、建元の基盤を論じ「飛鳥」の成立を説いた。『日本書紀』の「赤烏」などの鳥の祥瑞記事に着目し、「日の皇子」たる天武朝の徳政を象徴するととらえて次のように結論付けている。

瑞鳥の出現は、鳥が天翔る存在であるだけに、アスカと天との一体化を実感させ、アスカは瑞鳥に祝福された、天に準じる空間、「飛ぶ鳥」の里として、ここにその永遠への願いをこめて「飛鳥」とも表記されるに至ったのではなかろうか。「飛鳥」の表記に規範意識がともなうのも、この二字が祥瑞の思想を背景に好字と意識された結果であろう。

そして、枕詞としての用例が持統五年（六九一）の柿本人麻呂歌（2一九四）に初出することから、地名「飛鳥」の表記を前提に持統朝に人麻呂の周辺で生み出された枕詞であった可能性にも言及された。本田義憲氏は、先行して同様の見解を示しており、「飛鳥　明日香」を王権のトポロジーから説いた。[4]

人麻呂はしばしば他に例のない枕詞を用いることで知られる。「飛鳥　明日香」の例もそのように独創として理解することに否やはないが、「飛鳥」という表記がアスカと訓まれるようになった経緯と、現在の明日香村の地の古代における特殊な位置づけとが直結するかどうかは、にわかには結論し難い。はじめに述べたとおり、木簡資料においてより古い「飛鳥」の事例が確認できるからである。

〔見ヵ〕
・□□田五十戸
・飛鳥了身閑　　SX1220 水溜（木簡番号二四）

十月十二日飛鳥尼麻呂二出
SX1222 水溜（木簡番号八四）

・世牟止言而□
桔本止飛鳥寺
・「□□□□」　　SK1153 土坑（木簡番号九四五）

二四号の木簡は、飛鳥池工房遺跡の東谷筋のSX1220水溜遺構から出土しており、同じ炭層からは「丁丑年」（天武六年〈六七七〉）の紀年銘木簡（二号）も見つかった。「五十戸」の表記が含まれていることや書風などからみても、七世紀後半のものとされている。[5] また、八四号も、SX1222水溜の炭層三から出土し、同層から紀年銘木簡として「甲申年」（天武一三年〈六八四〉）の荷札木簡（一一二号）が見つかっている。国語学的にも貴重な史料として注目を集めた「飛鳥寺」木簡（九四五号）も、同じSK1153土坑からは「戊戌（年）」（文武二年〈六九八〉）の削屑木簡（一〇四三号、一〇四四号）が出土している。

これらの木簡を参照する限り、少なくとも朱鳥元年（六八六）当時に、「飛鳥」と書いてアスカと訓んでいたことは疑いようがなく、むしろそれ以前から用いられており、すでに定着していた可能性が高いと考えられる。

そうであれば、「飛鳥」は現在の明日香村の地名としてではなく、それ以前に人名や大和外の地名として成立していた表記であり訓みである、という可能性を視野に入れておくのが穏当であろう。『日本書紀』仁徳天皇条の「飛鳥山」や「飛鳥戸郡」といった河内国の地名表記や、『古事記』履中天皇条の「近飛鳥」「遠飛鳥」命名記事なども、奈良時代の表記であるとしても、由なしとは言い切れない。「飛鳥」という枕詞が、現存資料においては人麻呂歌に初出であるとはいえ、「とぶとりのあすか」という枕詞と被枕詞の関係性と、そこから生まれたであろう「飛鳥」の表記とは、天武朝の祥瑞思想だけでは説明できないものであると考えられる。

三、「飛鳥」と詠懐詩

ここで、万葉歌の四例のうち、巻一・二収載の三例が、故郷惜別歌と挽歌であることに注目しておきたい。

「飛鳥　明日香」という万葉歌の用例は、藤原京時代に集中するという時期的側面だけでなく内容的な偏在についても従来指摘があるが、先述のとおり、天武朝における飛鳥の位置付けとからめて議論が重ねられてきたといえる。

しかし、地名や人名にみられる「飛鳥」の表記は、必ずしも天武朝の飛鳥浄御原宮とだけ結びついていたとはいえない。

作者未詳歌である巻一・七八番歌は、題詞には和銅三年（七一〇）の平城遷都時とあるが、持統天皇が作者であるという異伝もあわせて伝えられており、その場合は持統八年（六九四）の藤原宮遷都の際の作歌とみなして、古歌を転用したと考えられている。巻二の二例はいずれも柿本人麻呂歌で、一九四番歌は持統五年（六九一）、一九六番歌は文武二年（七〇〇）と、挽歌の特性上、作歌年代はほぼ特定できる。

前掲の菊地論文では、祥瑞思想を背景として「とぶとりのあすか」という表現を理解した上で、それが歌の内容にも多分に関わることが言及されている。つまり、巻一・二の三例は、別離を主題とする点で共通し、枕詞がそれぞれの歌の基調をなしており、そこには天の観念に支えられた王権の聖地としての永遠性が意識されていた、という。

『万葉集』の歌々から、飛鳥の地が奈良朝に「故郷」と表現され、天武天皇を中心とした律令国家の聖地として認識されていたことは首肯されるが、「飛鳥　明日香」の三例については、歌の内容を重視すればむしろ墓地の印象が強いように思う。

ことに、七八番歌は、題詞に「古郷を望みて」とあり、歌中の「とぶとりのあすかの里」と「君があたり」がともに「古郷」に相当するとみられる。便宜上、次に再掲しておく。

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて迥かに古郷を望みて作れる歌〔一書に云はく、太上天皇の御製といへり〕

飛鳥の明日香の里を【飛鳥　明日香能里乎】置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ〔一は云はく、君があたりを見ずてかもあらむ〕　（一七八）

持統天皇の作歌との異伝を持つことから、この歌は、持統八年（六九四）の藤原宮遷都の際の歌ともいわれ、そうであれば、「君があたり」とは天武天皇陵を指すと考えることができ

る。

甘樫丘などの高所から展望すれば、明日香村岡に比定されている飛鳥浄御原宮跡と橿原市の藤原宮跡とは、望郷の念を起こすほど距離的な隔たりがあるとは思えないが、たしかに藤原宮側からは、明日香村野口の天武持統陵は甘樫丘などが邪魔して見えない位置になる。

志貴皇子が藤原宮遷都後に詠んだ、都が遠くなったので明日香風がむなしく吹いているという歌（一五一）にしても、実際の距離というよりは心理的な隔世感があるともいわれており、遷宮や遷都に際しての歌は、実景に即して理解すべきものでもないのであろう。

「飛鳥」という文字列は、漢語としてはごく一般的な言葉であり、ことさら取り沙汰する必要はないとみなされてきたのかも知れないが、はじめに述べたように、万葉歌においては「飛鳥　明日香」と、「とぶとりのあすか」の表記は統一されているといえ、書く側と読み手側との間にある一定の共通する印象をもたらしていた可能性が捨てきれない。

そこで、藤原京時代の知識層にも必読の書であったと思われる『文選』から、「飛鳥」の文字列を含む、阮籍の「詠懐詩」に着目しておきたい。

阮籍は三世紀の人物で、『隋書』に文集十巻が記され、『晋書』巻四九に本伝がある。もともと八十余首あったと伝わる「詠懐詩」の中から、『文選』には十七首が採られており、そこから「詠懐」という項目名も生じたとみられている。いわゆる「竹林の七賢」の一人であり、『文心雕龍』や『詩品』などでも高く評価され、代表作である「詠懐詩」の一部は『玉台新詠』にも採られるなど、後世への影響は多大である。

そうした阮籍の「詠懐詩十七首」には、全編にわたってさまざまな鳥の描写が登場する。自然を描写することで「懐いを詠ずる」のであるから当然ともいえるが、「飛鳥」という文字列に限定しても第四・第六・第十二の各篇にみえることが注目される。次にその原文と書き下し文を掲出しておく。(6)

昔日繁華子　安陵與龍陽
天夭桃李花　灼灼有輝光
悦懌若九春　磬折似秋霜
流眄発姿媚　言笑吐芬芳

昔日繁華の子は、安陵と龍陽となり。
夭夭たる桃李の花、灼灼として輝光有り。
悦懌すること九春の若く、磬折すること秋霜に似たり。
流眄して姿媚を発し、言笑し

携手等歓愛　宿昔同衣装
願為雙飛鳥　比翼共翺翔
丹青著明誓　永世不相忘
（『文選』巻第二十三・詩丙・詠懐「詠懐詩十七首」第四）

て芬芳を吐く。
手を携へて歓愛を等しくし、
宿昔は衣装を同じくす。
願はくは雙飛の鳥と為り、翼を比べて共に翺翔せん。
丹青もて明誓を著はし、永世相忘れざらん。

登高臨四野……北望青山阿
松柏翳岡岑　飛鳥鳴相過
感慨懐辛酸　怨毒常苦多
李公悲東門　蘇子狭三河
求仁自得仁　豈復歎咨嗟
（『文選』巻第二十三・詩丙・詠懐「詠懐詩十七首」第六）

高きに登りて四野に臨み、北のかた青山の阿を望む。
松柏は岡岑を翳ひ、飛鳥は鳴いて相過ぐ。
感慨して辛酸を懐き、怨毒常に苦多し。
李公は東門に悲しみ、蘇子は三河を狭しとす。
仁を求めて自ら仁を得たり、豈復た歎いて咨嗟せんや。

徘徊蓬池上……還顧望大梁
緑水揚洪波　曠野莽茫茫
走獣交横馳　飛鳥相隨翔
是時鶉火中　日月正相望
朔風厲厳寒　陰気下微霜
羈旅無儔匹　俛仰懐哀傷
小人計其功　君子道其常
豈惜終憔悴　詠言著斯章
（『文選』巻第二十三・詩丙・詠懐「詠懐詩十七首」第十二）

蓬池の上に徘徊し、還顧して大梁を望めば、
緑水は洪波を揚げ、曠野は莽として茫茫たり。
走獣交々横に馳せ、飛鳥相隨って翔る。
是の時鶉火は中し、日月正に相望む。
朔風厳寒を厲しくし、陰気微霜を下す。
羈旅儔匹無く、俛仰して哀傷を懐く。
小人は其の功を計り、君子は其の常を道とす。
豈終に憔悴するを惜しまんや、詠言して斯の章を著はす。

これらは単なる「飛ぶ鳥」ではなく、一定の印象を醸す表現

であったとみられ、「雙飛鳥」や「飛鳥鳴相過」「飛鳥相隨翔」など、仲むつまじく並んで飛ぶ鳥が想起されているようである。一方で、相対する「孤鳥」（「詠懐詩十七首」第十五）という表現もあり、いずれもただ漫然と鳥が飛んでいる景を叙したのではないといえよう。

また、第五首と第十二首は、高所からの眺望を詠むことで時事を歎いたとみられている。臣下による時事の詠出という意味では、到底天皇御製歌と同質とはいい得ないが、高所からの望郷というモチーフは重なり合うところが大きいのではなかろうか。

第五首においては、「高きに登りて四野に臨み、北のかた青山の阿を望む」と、高所から見える丘陵を描いているが、それは松柏に覆われた墓地である。

また、第十二首において描かれた「蓬池の上に徘徊し、還顧して大梁を望」むとは、かつての魏の都であった大梁を遠望している。

これらは、『万葉集』巻一・七八番歌の「迥かに古郷を望みて」という題詞の状況にも通じるように思われる。そうした表現の中で「飛鳥」は、仲むつまじく並んで飛ぶ鳥の描写としてだけでなく、旧都や墓地の景として寂寥感をも内包している。

たとえば「朝雲」（「詠懐詩十七首」第十七、など）が、宋玉の「高唐賦」を典拠としてその故事を想起させる語句であるように、「飛鳥」もこれらの「詠懐詩」を想起させたのではなかったか。少なくとも、すでに地名や人名としての「飛鳥」が表記されていた藤原宮時代において、その字面から「とぶとりの」の枕詞が生じた際には、阮籍の「詠懐詩」が意識されていた可能性があるのではないかと考える。

そう考えてこそ、望郷歌と挽歌という『万葉集』中の用例の偏在も理解できるように思われ、明日香川を詠出した人麻呂の挽歌二首（2一九四、一九六）についても、墓所をイメージさせつつ、仲むつまじく並んで飛ぶ鳥という生前の姿を想起させもする表現は、長歌の冒頭に詠出する意義があったと思われる。

なお、巻十六の三七九一番歌は作歌年代が判明しないながら他の三例よりは時代がくだるとみて、本稿ではほとんど触れなかった。ただ、「飛鳥　飛鳥壮（とぶとりのあすかをとこ）」と訓める表現の背景に、中国文学の「飛鳥」を置いてみると、求婚のくだりであることからみて、仲むつまじく並んで飛ぶ鳥の印象が合致すること、題詞には第五首と同様に「登高」の要素がみられること、についても付言しておきたい。

四、おわりに

以上、飛鳥池工房遺跡出土木簡の事例を援用し、飛鳥浄御原宮命名以前の「飛鳥」の例を確認して、先行研究の成果を踏まえつつ、「飛鳥　明日香（とぶとりのあすか）」の形成について小論を述べた。枕詞というきわめて日本的な問題である故か、一般的な語彙であるせいか、従来は中国文学における「飛鳥」の用例との比較検討はされてこなかったが、『文選』「詠懐詩」に代表される用例から、『万葉集』に偏在する「飛鳥　明日香（とぶとりのあすか）」という表現の背景に、旧都や墓地への思慕、仲むつまじい様子の描写としての「飛鳥」を想定することを試みた。

かつて、明治時代のドイツ語訳と英訳の万葉歌について論じたことがあるが[7]、その際、翻訳には言葉というよりは異文化をどう訳すかという問題が常に横たわっていることを感じた。ことに、枕詞や序詞をどう訳すかという問題は、訳さないという選択をする場合も含めて、その訳文の肝となっていた。当たり前のことを確認したに過ぎないが、古代和歌の特徴をあらためて浮き彫りにし、比較文学における重要な視点を認識する契機となった。

それはなにも近現代だけの問題ではなく、『万葉集』自身が当時直面していた問題でもあったことだろう。『文選』などの先行書を享受し、それらをどう和化し、また倭文として書き記すことができるのか、天武・持統朝においてさまざまな動きがあったことは想像に難くない。そうした認識から、当時の創造の一端を探ることを試みた次第である。

注

（1）菊地義裕「枕詞『飛ぶ鳥の』の成立」『東洋大短大紀要』二六号（一九九四年一二月）

（2）書き下し文および原文は原則として、中西進『万葉集 全訳注原文付』全四巻（講談社文庫、一九七八～一九八三年）に拠った。

（3）金井精一「枕詞『飛鳥』四音考」『万葉詩史の論』（笠間書院、一九八四年）

（4）本田義憲「万葉歌人と飛鳥」井上光貞・門脇禎二編『古代を考える飛鳥』（吉川弘文館、一九八七年）にも同様の指摘がある。

（5）木簡資料についてはすべて、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編『飛鳥藤原京木簡一 飛鳥池・山田寺木簡 解説』（二〇〇七年）に拠る。

（6）内田泉之助・網祐次校注『新釈漢文大系14 文選（詩篇）上』（明治書院、一九六三年）に拠る。

（7）拙稿「『万葉集』と欧文挿絵本―その今日的意義について―」『万葉古代学研究所年報』八号（二〇一〇年三月）